

第3号 20円  
昭和40年9月25日

内容

待望の開館式を行なう… 2  
 セミナー・ハウスの開館… 4  
 大学教育の新しい基礎づくり… 5  
 開館記念セミナー… 6  
 セミナー・ハウスの利用状況… 8

# セミナー・ハウス

## SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

東京都中央区日本橋本町3の3  
 三井銀行本町支店ビル3階  
 電話 東京(270)4431  
 振替口座 東京74590番  
 (所在地)  
 東京都八王子市下柚木  
 電話 0426-④-4041-2

編集・発行人 飯田宗一郎  
製作 中央公論事業出版

大学セミナー・ハウスがいよいよ開館できるまでになったことは私ども大学に関係している者にとってひじょうな喜びである。心から慶祝の意を表したい。大学関係の人や文化人はいい考えを持ち出しはするけれど、なかなか実行してくれないというところに特色があるが、大学セミナー・ハウスの構想が、かような形で実現したということとは、いわば奇跡的なことと云ってよいであろう。夢を追うて実現にいたらしめた飯田さんの熱意に敬意を表さないわけにはいかない。私も国際大学協会に関係しておりまして、セミナー・ハウスのような施設はおそらく世界に例のない、世界一の施設だと思ふ。世界にないものができたということとは、まことに愉快なことである。

私は今でも記憶に残っており、一番有難く思っていることは、五、五年前、東京大学で勉強していたとき、東大ではじめてセミナーというものがはじめられたことである。当時ドイツからこられた経済学史担当のベンツェンという教授がおられた。彼が東大の経済学科にこられて第一に私どもを指導されたのがセミナーであって、そういうものを知らない私どもは少し呆気にとられたわけであったが、上から講義をきかされるのではなく、自分で勉強するということが大事であることをその時に教わり、大学における勉強の仕方を本

式に覚えたのである。また高野岩三郎先生もセミナーを開いてくれたので、いっそうセミナーというものの意義を覚えることができた。このようなセミナーの制度が大学の教育の方法として開かれたのは、日本の大学制度についてはきわめて意義のある発足であった。

五五年後の今日において、東大生活で深い記憶として残っている

### 大学教育に新生面を拓く

大学セミナー・ハウスの開館を祝して



日本育英会会長  
 森戸辰男

もっとも望ましいに違いない。一方において、一つの大学ではセミナーがあっても、他の大学の仲間と一緒に勉強をするということが、ひじょうに困難である。私はよく「日本には大学が集まった全体の組織がありませんか」ときかれるのですが、「どうもそういう組織はありません」とい

課せられているというべきである。現代は、いわゆる大学の量的な拡大がひじょうな勢いで世界的に進んでいる。そして大学の量的な膨脹と大学の質的な向上とをどう結びつけるかということが大学教育における世界的な重要な問題となっている。

今日のような日本の特殊事情では、大学の入学者はひじょうにふえるわけであるから、多人数教育はどうしても避け難い。科学技術の手段を使って、多人数教育をどうしてやるかを、大学は勇気をもってなさなければならぬと思ふ。しかし機械化された多人数教育だけでは大学の学問を向上させるということとは期待できない。そこでもっと少数のものが先生の指導をうけながら勉強できる制度が必要なのである。それがセミナーの意味である。

かような観点に立つならば、今日の大学の膨脹の中で大学の使命を達成するためにセミナーがきわめて大事なものであることを反省する上において、この大学セミナー・ハウスは一つのシンボルであると思う。私ども大学に関係する者は、日本の大学教育のもっている欠陥を、これによって補うような努力をする責任があると思ふ。大学セミナー・ハウスの開館を祝うということは、一面においてそのような責任を負うことでなければならぬ。

(文責編集者)

# 待望の開館式を行なう

## 大学セミナー・ハウスの

### 歴史的門出を祝う

昭和四〇年七月五日をもって大学セミナー・ハウスは開館した。この日歴史的門出を祝って下さる外国公館代表者、会員校の学長、学部長など来賓約六〇名、開館記念セミナー参加学生一、二名、その他合計約二〇〇名の出席を得て、新装成った本館四階の大食堂を会場として気品高い学問的雰囲気の中で盛大に行なわれた。当日の天候や開館セミナーの情景については、別掲の東京工大教授川喜田二郎先生が東京新聞にお書き下さった一文を借用した。日本の教育に

- 開館式プログラム**
- 司式 専務理事 飯田宗一郎
  - 合唱 「青春讃歌」  
国立音楽大学合唱団
  - 挨拶 理事長 大浜信泉
  - 式辞 館長 茅 誠司
  - 合唱 「若人の歌」  
国立音楽大学合唱団
  - 祝辞 教育界代表 森戸辰男  
社会人代表 井深 大  
文部省代表 村山松雄

一紀元を画した大学セミナー・ハウスの開館についての説明は、これ以上の名文を期待することはできないと思われるからである。あいにくの雨天でまだ道路の舗装ができていないため、本館の周囲は文字どおりの泥んこで、板を渡してやっと歩行できるまでの道を急造した。まさしく新天地に開拓した力強い息吹を感じる光景であった。永く忘れ得ない印象として来会者の記憶に残るであろう。定刻の一〇時三〇分が少しおくれ、飯田専務理事が開会を宣し、国立音楽大学の協賛を得て岡本仁氏指揮による学生三〇名からなる合唱団による「青春讃歌」が厳粛な式場の中にすばらしい歌声となつて流れ、セミナー・ハウスの開館式にふさわしい雰囲気をつくってくれた。

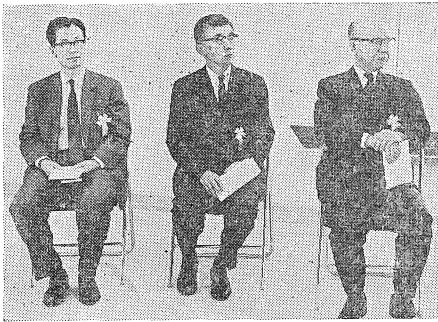
大浜理事長は挨拶に立たれ、来賓に対する謝辞とセミナー・ハウスが今日開館するまでにいたった経緯を述べられ、その間の社会か

らうけた支援と同情、実現にまで漕ぎつけた喜びを感謝をもって語られた。

セミナー・ハウスも開館はしたけれど当分は Hit and miss, Trial and Error の過程をたどるであろうが、セミナー・ハウスを中心として大学における人間形成が行なわれ、国公私相互の交流によってユニヴァンシティー・コミュニティーという思想がわが国に生まれるよう切望された。

茅館長はご自身の学生時代や教授時代の経験を語られ、大学生活の中で教授と学生の個人的接触がいかに人生において貴重なことであるかを語られ、セミナー・ハウスが今後そのような役割を果たすところになるようにとの抱負を述べられた。

祝辞を述べられた  
森戸、井深、村山の三先生



# 教育の機械化と人間形成

セミナー・ハウス開設の意味するもの

ソニー株式会社 井深 大

願ぬかるみの道を歩いてこの建物に入ってきたが、入ってきた途端にひじょうにほのぼのとしたものを感じた。今日お集まりの先生方は大部分の方を存じているが、こういう方々のお力と善意によって、こういうものが生まれ得たといいことに對して私はひじょうにうれしく感じている。なにもこの建物の壁が曲っているからおもしろく思ったのではなく、こういうものが生まれ得てくること、日本の中に生まれ得てくることに對して、私はひじょうなうれしさを感ぜないわけにはいかない。

世の中では、よく同じ釜の飯を食った仲間というようなことがいわれるが、いろいろな社会で起居をともしして語り合うことが、われわれの人生のうえでどんなに大きな働きをするかということは、自分のつたない経験を通じても考えられることである。私も学生の頃に山中湖のYMC Aのキャンプや東山荘などで、わずかばかり過ぎた時間というものが、後々にいたってどんな働きをしているかをほんとうに思い出させてくれるのである。

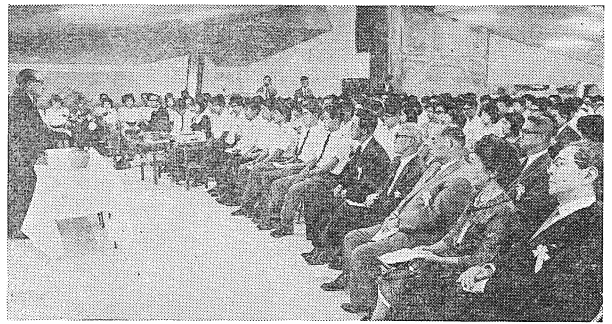
正直なところ、私は今日の大量生産の教育というものは、機械化

でほとんどやっつけてしまいうるのではないかと思っている。機械化しないのは、機械を買うよりも先生の月給の方が安いから、それですませているだけの話だろうと思っ

て、ただ先程来諸先生のお話にもあったように、人間と人間とのつながり、人間の手をとっての指導だけが問題である。教育の中でなにが機械化できて、なにが人間対人間でやらなければならないかを、もう少し考えたならば、セミナー・ハウスのようなものは、もっと、もっとたくさん日本中にもっと早くできてしかるべきだったろうと思う。今できた一つのセミナー・ハウスが建てられたことを稀少価値であるように考えなければならないのは、ほんとうの教育がまだ日本で考えられていなかったからであると思う。

しかしこうした建物ができたこととはなによりうれしいことで、これがよりどころとなつて、社会に広がりが、社会がいい方向へ進んでいく大きな力がこの建物から生まれるだろうことを信じかつ期待したい。そして社会の人たちもこういうものををつくるための協力を惜しんでほらないと思う。

(文責編集者)



開館式・大浜理事長の挨拶

これ教育界と社会人を代表されるに最適任者で、別掲のようなきわめて教育的なメッセージを述べられ、セミナー・ハウスの構想が現代の日本に欠くことのできない施設であることを立証された。

村山審議官は文部大臣の祝辞を述べられ、国の立場から力強い激励をセミナー・ハウスに寄せてくれた。最後に開館記念セミナー運営委員長東京工大永井道雄教授が立たれ、このセミナーの内容と目的について紹介された。

式典を終ってから参列者一同に施設の見学を願う予定であったが折り悪しく雨天でもあり、構内の

の各建物間の道路も悪く、本館より外へでることができないので、午餐会場をつくるまで、約一時間、ロビー・ラウンジなどで休憩をされたり、ブリッジから丘の上にて、しばし近傍の風景を眺められたり、セミナー学生と指導教授の顔合わせなどに過ごした。

午餐会はトリスト・マスター飯田専務理事の合図によって、午後一時開会。本館四階の大食堂は、すばらしい午餐会場となった。まず、メイン・テーブルの東京大学総長大河内一男先生のユーモアに富んだ挨拶をもって乾杯し、にぎやかな祝宴となった。

半ばを過ぎたところで、スピーチに移り、まず初代理事長石館守三博士が、当初の思い出を語られ、つぎに東畑精一老先生が東大農学部時代や幼年時代の教育的環境について述べ、最後にブリテッシュ・カウンスルのリン・プトン氏が世界にも類のない斬新なセミナー・ハウスの教育的役割を賞讃され、上智大学の柳瀬副学長が通訳された。

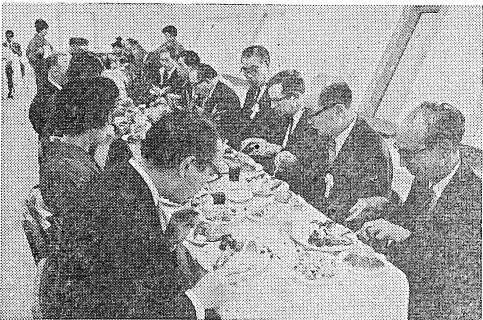
午後二時を少し過ぎてこの午餐会を閉じたが、参会者の一人一人が持ってきて下さった祝いのごちそうが、いつまでも会場にあふれていた。

とまれ開館の式典とそれにつづく祝賀午餐会によって、めでたく大学セミナー・ハウス本館のこけら落としは終わったわけである。

開館式出席者芳名 (敬称略)

【大学関係】

- 東京大学総長 大河内一男
- 同 法学部長 久保 正幡
- 同 薬学部長 野上 寿
- 一橋大学長 増田 四郎
- 東京医科歯科大学長 岡田 正弘
- 東京農工大学長 井上 吉元
- 同 農学部長 近藤 頼己
- 同 学生部長 豊沢 登
- 電気通信大学学生部長 松村 定雄
- 都立大学理学部長 矢沢 大三
- 早稲田大学政経学部長 小松 芳喬
- 同 教育学部長 大滝 武
- 日本女子大学長 有賀喜左衛門
- 同 家政学部長 道 喜美代
- 同 文学部長 中島 武雄



祝賀午餐会風景

日本女子大学一般教育主任 栗原嘉名芽

明治大学総長 武田 孟

中央大学総長 升本喜兵衛

同 商学部長 石原 忠男

同 文学部長 布施 欽吾

同 理学部長 広瀬 敬一

上智大学副学長 柳瀬 陸男

武蔵工業大学長 山田良之助

明治学院大学経済学部長 平出 宣道

津田塾大学学生部長 山崎 孝子

青山学院総主事 小島 貞彦

国立音楽大学理事長 中館 耕蔵

三井銀行社長 田中久兵衛

文部省学生課長 笠木 三郎

アジア財団 グレン・パワサクス

英国大使館 F・トムリン 清水建設常務 玉真 秀雄

【セミナー・ハウス関係】 早稲田大学総長 大浜 信泉

同 前東京大学総長 茅 誠司

同 東京大学名誉教授 石館 守三

同 前日本女子大学長 同 夫人

東京工業大学教授 上代 たの

東京女子大学教授 永井 道雄

慶応義塾大学教授 白井 常

早稲田大学教授 佐原 六郎

日本女子大学教授 村井 資長

東京大学教養学部助教 大原 恭子

西村 秀夫

大学セミナー・ハウス落成記念セミナー(予告)

期日 昭和四〇年十一月二、三、四日

主題 現代思潮と日本

「近代化の思想と論理」

——とくに新しい人間像の形成のために——

「ウェバー社会学における思想と経済」 一橋大学教授 高島 善哉氏

セクション別指導教授 成蹊大学教授 安藤英治氏 一橋大学教授 鈴木秀勇氏

神奈川大学 神奈川 教授 内田芳明氏 一橋大学 博士課程 富沢賢治氏

立教大学教授 住谷一彦氏 一橋大学 博士課程 星野彰男氏

運営委員

委員長 慶応義塾大学教授 村井 実氏

早稲田大学教授 早稲田大学教授 山岡喜久男氏

早稲田大学教授 川原 栄峰氏

東京女子大学教授 白井 常氏

# 大学セミナー・ハウスの開館

日本の教育に一紀元を画す

東京工業大学教授 川喜田 二郎

「マスプロ教育の弊害を少しでも救い、教師と学生、学生相互間の顔との接触による教育を復活する」のが、大学セミナー・ハウスのねらいであったろう。その開館記念セミナーは、七月五、六、七日の三日間にわたって行なわれた。印刷物や新聞では見たものの、果たしてどんなところだろう。こんな好奇心を混えて、私は八王子駅に降り立った。そこからバスでももの三十分、野猿峠という、名前も野趣のある停留所で降りた。

バス停からすぐわきの丘の上の本館まで泥んこ道。折りからの悪天候のせいもあるが、この泥道といたるところで槌音(つちおと)も高い建設の仕上げの光景とが、かえって私たちの心を打つ。本館は世にも変わった外見で、まるで大きなキノコがこの緑の丘の上に生え出たように、上部へ樹形(ますがた)にのび上がったコンクリート造り。中に入れば、一階は事務室。二、三階には館長をはじめとする首脳者たちの執務室や会議

室やラウンジ。四階は広い食堂に なっている。その四階から見おろすと、本館の下の緑の斜面に点々と群がるカマボコ型のユニットハウスがある。それはふたりずつが寝泊りできるハウスで、その間に混りすこし大きなセミナー・ルームが二つ三つ眼をひく。

開館式は定刻一〇時半にそれほどおくれることなく本館の食堂で行なわれた。理事長の大浜早大総長のあいさつにはじまり、この企画に尽くされた館長茅誠司氏あるいは来賓森戸辰男氏や井深大氏らのお話はいずれも来会者の心をひきつけるものだった。お話のうまさだけでなく、マスプロ教育をめぐる課題の深刻さが聴衆をとらえたものと思う。

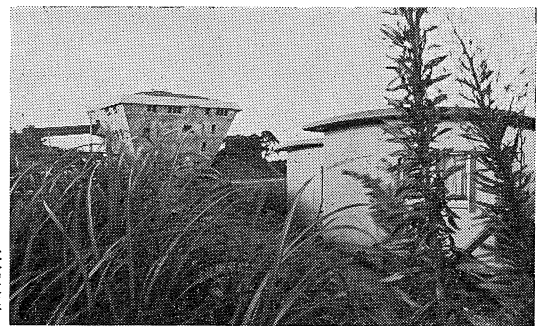
ついで参加学生たちは五班のセクシオンに編成され、そのそれぞれに指導教授が一人ずつついた。私もそのひとりだった。一セクシオンが二〇人余りというのは多すぎる。学生たちは都内の一五、六の大学からで、男女ほぼ半数ずつというのも新時代にふさわしい。

このために雰囲気はグッとやわらかくなる。旧時代に育ったご年配間は「さても時代は変わったものよ」といわぬばかりの面もちであった。

セミナーの共通テーマは「世界のなかの日本」。これをめぐり、京大の貝塚茂樹教授の日本文化論、東大名譽教授の山内恭彦氏の科学技術論、アジア経済研究所長東畑精一氏の低開発国援助問題、の全体講義が行なわれた。これが初日から二日目の朝にわたって行なわれた後、学生たちは各セクシオンに分かれて、三先生の講演を討議の材料にしつつ、熱心なセミナーを持った。

こういふいかにも三日間肩の凝るようなセミナーに明けくれたようにきこえる。しかしそこは主催者の企画よろしきを得て、夕食時間やお茶と懇談の時間が十分とあってある。施設がなお未完成でいくつも細かな不便を感じたにもかかわらず、学生諸君は驚くほどなごやかにうちとけた。

セクシオンの指導で感じたことは、学生だけでなくわれわれすべてが、まだ討論に未熟だということ。だがそれも、わずか三日のうち、かなりの向上を示している。うらむらくは、三日間というのが短かすぎたことである。このセミナーでただひとつ大いにプロダラムの狂った点がある。それは二日目の夜、九時に終わるべきセクシオン討議が、どのセクシオン



本館遠望



本館前より宿舎を望む

も大幅に時間超過をしたことである。なかには一二時をすぎたセクシオンまであった。期せずしてそういう番狂わせになったこの事実を私は計画の失敗とみるより大成功とみた。

こうして最初のセミナーは終った。おそらく、一起一伏はある。しかしここにはじまったセミナー発展の方向は、けっきょくは日本の教育に一紀元を画してゆくだろう。ただ、予定された講師の中にかんがりの故障ができたことは、ギリギリいっぱいスケジューリングに心身をすりへらしているオトナの社会の、もうひとつの大きな危機を暗示しているように思う。

最終日の午前中には、二時間半を費した全体討議が行なわれた。各セクシオンから一人ずつ出された五人の学生の意見発表を中心に、指導教授や運営委員を含む全学生が討論を交わした。個人の幸福という問題が共通に関心をひいていることが判った。大人なのに討論が活発だったことは、やはりそれまでの二泊の功徳である。これが終わった後、この事業を推進してきた中心人物飯田宗一郎氏(セミナー・ハウス事務局長)の淡々

(昭和四〇年七月一六日付東京新聞より転載)

# 大学教育の新しい基礎づくり

## 大学セミナー・ハウスの活動

### その第一歩を踏み出す

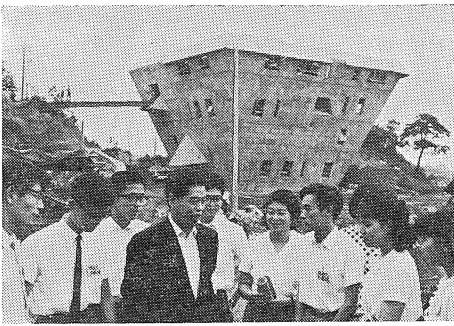
#### 永井道雄東京工大教授を

#### 運営委員長に



大学セミナー・ハウスは七月五日の開館を記念してわが国の大学教育において画期的ともいうべき五、六、七日の二泊三日のセミナーを行なった。セミナー・ハウスの事業開始とそれを記念して行なわれた新しいセミナー形式は、わ

永井委員長とセミナーの学生たち



が国の大学教育の歴史の中で高い評価をうけるに違いない。このことについては前ページに転載した川喜田東京工大教授の一文で説明は十分であるが、泊り込みで取材された毎日新聞の記者が書かれた七月一六日付の同紙夕刊の学芸欄の特集は、さまざまな角度から「世界の中の日本」が論じられたことやグループ討議において、全体討議において個人の幸福や日本文明について活発に討論された情景を詳しく述べている。毎日新聞はその記事の最後で、このセミナーは大学教育の新しい発展にとって注目すべき新基礎をつくったと結論されている。学生諸君も同じようによい印象をうけられたことが多くのアンケートによってわかった。

このセミナーは大学セミナー・ハウスの歴史的門出になるので、手塚富雄先生を委員長とする企画

委員会は、テーマの設定とそれにふさわしい教授陣を揃えることに最善の努力をされ、さらにこのセミナーから大いなる成果を挙げるため組織された永井道雄先生を委員長とする運営委員会は白井常、西村秀夫両先生としばしば会合し、万全の準備をされた。運営委員は全員三日間泊り込みで、生活の全般にわたる世話をされ、永井委員長のごときは、閉会の翌日には渡米されるというあわただしさの中で、学生と大学を思う至情をもってこの記念セミナーのために奉仕された。

とまれこの開館記念セミナーが大いなる成果を収めたのは、すばらしい全体講義の教授陣、各セクションを指導された若手学者の意欲的な態度、それにふさわしい各大学の優秀な学生の熱心な応答、ベテランの運営振りとが、食堂のごちそう、教授と学生との人間的な接触によるなごやかな雰囲気とよく調和して、展開されたからである。

セクションは男女別、学科別、学校別等を均等に考慮し、はじめ六セクションを編成したが東北大学の林竹二教授が緊急要務で欠席のやむなきにいたったのでEセクションがなくなり、一セクションが約二〇名とし、五セクションが編成された。主題に対する全体講義は人文、社会、自然の三分野から行ない、一般教育の効果をねらった。ややもすればわが国の大学教

育において一般教育が軽視され、その成果が疑われるとき、あえて大学セミナー・ハウスが一般教育の目的をもって、このセミナーを開催したことは理由のないことではなかった。セミナー・ハウスの教育的使命を、もしくは日本の大学教育に奉仕すべき一つの分野をここに見出したからである。

セクション担当者は左記のとおり。

- A セクション 東京工大教授 川喜田二郎
- B セクション 京都大学人文科学研究所 加藤 秀俊

- C セクション アジア経済研究所 長井 信一
- D セクション アジア経済研究所 小島 麗逸

- F セクション 上智大学教授 鈴木 皇

- (参加大学および学生数)
- 東京大学(六)、東京教育大学(一)、東京工業大学(六)、東京学芸大学(一)、東京農工大学(二)、お茶の水女子大学(三)、都立大学(四)、早稲田大学(二一)、日本女子大学(一四)、慶応大学(一)、明治大学(六)、青山学院大学(一)、法政大学(五)、立教大学(三)、東京女子大学(二一)、武蔵工業大学(四)、津田塾大学(九)、上智大学(五)、合計一〇三名(男子五六、女子四七)

プログラムも順調に進行したが、途中若干変更して、指導教授

たちのパネル方式の討議を加えたり、第三日目の朝には五時三〇分起床、多摩丘陵を平山城趾までハイキングする有志もあり、あるいは大先生をつかまえて夜一二時過ぎまで話し合いをするなど、ロビームラウンジも元氣な若い人たちがいつも充たされていた。

最終プログラムの全体討議は、永井委員長によって司会され、まず各セクションの報告が行なわれた。Aは早大の浅井義博君、Bは農工大の平地康則君、Cは早大の宮崎示君、Dは東大の安部真一君、Fは東京工大の深見拓史君である。

閉会式には各セクションの代表から感謝の辞が述べられ、あるいは期待や希望が述べられた。記念植樹や記念誌発行などが提案され、専務理事のセミナー・ハウス建設にいたる経緯についての感謝や永井委員長の大学教育の現実に対処しようとする教育愛の閉会のことばをもって、感動のうちに記念セミナーを閉じた。

大学セミナー・ハウスは、おそらく今後も一起一伏、ヒット・アンド・ミスが続けるであろうが、日本の大学の中には、大学セミナー・ハウスを支える地盤があることを、このセミナーに参加した教授と学生を通じて知ることができたので、大学セミナー・ハウスの前途は幸多いものになるであろう。第一回セミナーはその確信を与えてくれた。

# 開館記念セミナー

■ 主題 ■ 「世界の中の日本」 ■

セミナーの共通テーマを、人文、社会、自然の各科学から学び、セミナー参加学生はそこを基点として主題にアプローチしたわけである。このセミナーに参加できなかった学生諸君も世界的視野において日本を考える訓練をする

## ■第1講(人文)

### 東アジア大陸文明と日本



京都大学教授 貝塚茂樹

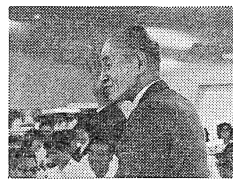
文明は固定なものではなくて、生きたものであり、生きたものが自己以外のなにかにぶつかって、そこで反応を起こし、その中で文明をつくってゆくものであると考える。また、文明はあるものから自然発生的に発展するものとみるのではなく、生態学的にとらえるのが私の立場である。近代ヨーロッパ文明がギリシャ・ローマ文明から相統をうけているように、日本の文明も中国大陸の文明から相統をうけているが、そこ

で、その相統の仕方が問題である。ヨーロッパではギリシャ人、ローマ人がそのまま後世に広がったのではなくて、ゲルマン人が入ってきて、まるで混血が起こって新しい人種が生まれたようになり、文明を受け継いでいる人の性質が変わってしまっている。一方中国ではそういうことはなくて、中国民族の連続性というものがそのまま続いているわけである。そういうわけで、近代ヨーロッパ文明はギリシャ・ローマ文明を親とする

子といえるが、日本の文明は中国文明を親とする子というよりも、むしろ中国文明を本家とする分家であるといった方がよい。その分家としては朝鮮、ベトナムなどもあげられる。それであるから、ギリシャ・ローマ文明はヨーロッパ文明の模範としての古典文明とよばれ、その理想となつて、相統されてきているのであり、中国文明は近世にいたり、日本文明と別なものが、対抗的なものとして考えはじめたのであろう。この日本文明が中国文明と別なものであるというところ、つまり、日本の文明の独自性は室町時代にみられるとする人もあるが、完全な文明の独自性、独立性をもったのは徳川時代に伊藤仁斎、荻生徂徠、本居宣長がでてからであると思う。トインビーは「キリスト教という独自の宗教はヘレニスティック時代に勃興するにもかかわらず、ヘレニスティック社会そのものの中からでてきたものではない、シリア社会からでてきたものである。ヨーロッパ文明の正統な型ではない。他の文明との接触の中で、そしてその文明の影響のもとにできた」といつているが、これがひじょうに重要な点で、日本の文明も中国大陸の文明と接触し影響を受けつつ、その中から日本の独自の文明をつくりあげてきたのであるとみることができるところである。現在、日本の独自の文明が保持できるかどうかの問題がある。日本の

## ■第2講(社会)

### 後進国問題



東京大学名誉教授 東畑精一

後進国といっても多いから、東南アジアの一〇カ国ばかりの経済上の話をする。一九五〇年代の一〇年間の経済成長率は平均して約三・七％であったが、日本が明治以後、戦争になる前は全体として約四％だから、そんなに低くない。けれども人口の猛烈な増加率を考慮すると成長はわずかである。一九六〇年代の一〇年間の見通しとしては、個人の実質所得の増加は一・八％ぐらいであろう。二％弱というところは世界でも最低の数字である。一九七〇年代の見通しは日本の個人所得も一、〇〇〇ドルに近く

が、中国文明に関しては、文化の中にある政治的意図というものを読みとることなく撰取して、その中から独自の道をつみつけた。であるから、自由にヨーロッパ文明を受け入れていって、その中から、自然に日本の独自の道をみ出すだろうと楽観している。

なり、ヨーロッパは一、〇〇〇ドルを越え、アジアの場合は大概は六五ドルから一〇〇ドル以下である。伸びることは確かであるが、各国の差というものは開いてきて、世界的にいえば多数の貧乏な国と少数の富んだ国がむきあってくることになる。現在の国連の会議にもその対立が反映されている。では、後進国の経済成長がうまくゆかないのは何故か。どの国も独立後工業化しようとしたが、工場をつくってもマン・パワーがなく、関連産業もないために大部分失敗した。マン・パワーを外国人で補えばよいと考

えられるが、独立国としての意識が外国人を排斥している。日本はこと産業に関する限り、特別に外国人を排斥することなく、マン・パワーとしての外国人に対して多額の金をかけてきた。日本の工業化の陰には長年の準備があったのであって、一度に産業が起こると考えることは認識不足である。後進国の工業化方針は一つの工業さえよくすれば関連産業もよくなり、農業もひきあげるといえる。push 式的应用であるといえる。しかし後進国の構造はその方式がうまくゆくほどデリケートな関連をもっていないのである。日本が賠償として発電所を造ったり、自動車を送ったけれども、電気の使用どころがないし、賠償がすんだ

ら自動車の再生産ができるかどうかも疑わしいという状態である。また、長く植民地として社会が固定されたまま放置され、西欧のように産業革命、社会革命を経ていないので近代化の基盤がないのである。身分制度が人材の開発をさまたげている。殺生禁止で害虫駆除ができない。来世宗教が経済活動を重要視しない。とにかく経済に対して文化価値が低い。教育の問題としては八〇〜九〇%が文盲であり、教える先生から養成しなければならぬ状態、教育ということを考える感覚すらもない。これらの問題があり、後進国の開発は困難ではあるが、抽象的な段階からだんだん地についたことがなされてきたという段階にある。

■第3講(自然)

国民性と科学の国際性

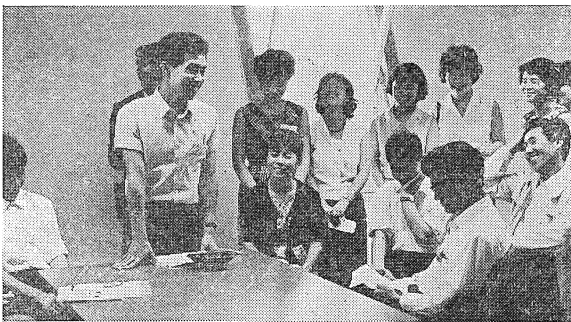
東京大学名誉教授 山内 恭彦

国家と科学という問題を最初に提出しますが、科学というのは、international なものであって、特別に国家というものがあまり意味をなさない。それは科学が客観的な事実をもとにしているからである。国家によって科学の進歩の

差があるが、科学について一流の国が二流になることもあり、不変なことではない。しかし、科学者はどこかの国に属しているわけですから、国民意識なくして科学を規定することはできない。要するにこのことは科学に国境はない

が、科学者には国境があるという言葉に表現されよう。特に軍事的な問題については科学者の意見も分かれ、水爆を製造する国家の政策に対して、反対する科学者を協力する科学者が出てくるわけである。自分の国の軍事力を強めることが国際平和のためだとする科学者がいるが、武力というものがある国際間における力の表示としての意義については疑問をもつ。核兵器をいろいろな国が開発しているが、果たしてそれが使えるかどうか。それだけ国家の力としては意味を失う。最近までは国家の生産力を誇った。生産力を伸すことは必要ではあるが限界がある。

セミナー風景



国家の威信を高めるものは科学的技術的発明をするにあると考える。皆さんでこの点をよく検討してみて下さい。さらに科学技術の発達は人類の幸福の増進につながっている。そして、その幸福は科学の応用によって得られる物質的欲望の充足にすべて得られるというのではなく、科学の成果を享受するとともに、新しい知識を追究し科学の進歩を促すところにあるのではなからうか。このことは単に科学が応用されて、われわれにどういう幸福を与えるかという点からのみ科学を評価しないで、人間が本来求めているものを得ようとするの努力であるという科学の理解に結びついている。

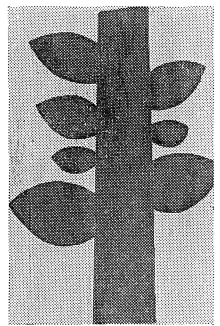
科学と技術の関係にふれるならば、科学はひじょうに純粹な知的探究であり、技術はその応用で生産に繋がるものであるといて、両者を強く差別することはできない。今日、科学と技術は相伴って進んでいるからである。極端にアカデミックなもの、極端に実際的な技術が、両者を明らかに区別しますが、実際に進んでいるのはその境界にあるところが一番めざましい。だから両者の境界を育てるような体制にならないならば、日本の科学技術を進歩させてゆくということが、ひじょうに高尚な抽象的な科学と、ひじょうに実際的な技術ということになっては困ると思う。また国民性というものはなんともし方がないので、外

●寄贈図書

国とくらべて、より悪いといってみてもどうにもならないものであるから、あるがままにそれに適応したようにやってゆく方がよいと思う。日本人の国民性には文化をどんどんとり入れ、あらゆることに手を出すという適応性がある。その適応性をよい悪いというよりも、科学技術の発達のために生かしてゆくことがよい。変化の激しい時代には適応性も必要なのである。そして他国の国民性をも尊重し、容認し、研究成果を交換し合うことが科学技術の進歩にとって大切なことである。

- ブリタニカ百科事典一揃
- ブリタニカ日本支社版
- 東京ロータリークラブ版
- 日本の女子教育 上代 たの殿
- 山の上にある病院 西村 秀夫殿
- 住居学 吉阪 隆正殿
- アジア歴史事典全一〇巻
- 世界歴史事典全一〇巻
- 大人名事典全五巻
- 世界大百科事典全三三巻
- 演劇百科大事典全六巻
- 音楽事典全五巻
- 名著大事典全八巻
- 世界文化地理大系全二八巻
- 国民百科事典全七巻
- 日本語の歴史全七巻
- 政治学事典
- 経済学事典

平凡社殿



セミナー室の番号標  
(七葉は七号室を示す)

●セミナー・ハウス  
利用状況

◆七月

開館記念セミナー

- 都立大学教授 唄 孝一氏
- 東京大学教授 松田 智雄氏
- 公害研究会(東大法学部他) 加藤 一郎氏
- 東京大学教授 加藤 一郎氏
- 日本私立大学連盟事務研修会 高村 象平氏
- 慶応大学教授 高村 象平氏
- 都立大学教授 半谷 高久氏
- 日本大学教授 篠原 弘志氏
- 東京女子大学 中山 三恵氏
- 上智大学教授 山内 恭彦氏
- 都立大学教授 佐竹 一夫氏
- 都立大学教授 金子ハルオ氏
- 日本私立大学連盟厚生補導研究会 西村 秀夫氏
- 東京大学助教授 西村 秀夫氏
- 明治史共同研究会(東西各大学) 林 竹二氏
- 東北大学教授 林 竹二氏

- ◆八月
- 東京大学教授 一丸 節夫氏
- 母親心理学研究会 松村 康平氏

日本国際問題研究所夏季合宿セミナー  
お茶の水女子大学教授 松村 康平氏

国際経済商学学生協会  
早稲田大学教授 中島 正信氏

基督教友会日本年会修養会  
基督教学校教育同盟新任教師研修会

東京大学教授 戸塚 元吉氏

都立大学教授 竹内 幹敏氏

青山学院本部研修会  
立教大学教授 安藤 瑞夫氏

東京大学教授 切替 一郎氏

中央大学教授 浅野 栄一氏

学芸大学教授 深海 竜夫氏

都立大学教授 中野 尊正氏

国際関係会  
慶応大学教授 清岡 映一氏

全国大学院都市計画  
早稲田大学教授 吉阪 隆正氏

立教大学教授 佐藤誠三郎氏

慶応大学教授 小高 泰雄氏

東京女子大学教授 高田洋一郎氏

慶応大学教授 峯村 光郎氏

中央大学教授 正田 彬氏

都立大学教授 岩尾 裕純氏

都立大学教授 河村 望氏

上智大学教授 佐藤 隆夫氏

全国商工会連合会 鈴木 皇氏

日本大学教授 名東 孝二氏

東京女子大学教授 藤永 保氏

横浜市図書館 佃 実夫氏

東京大学教授 齋藤 真氏

都立大学教授 東 洋一氏

国際基督教大学入学者歓迎集会  
都立大学教授 金田 一雄氏

都立大学教授 林 栄夫氏

法政大学教授 高橋 誠氏

明治学院大学教授 齋藤 茂夫氏

明治学院大学音楽部  
池宮 英才氏

日本女子大学教授 青山 吉信氏

東洋レヨン管理者講座  
東京女子大学教授 白井 常氏

成蹊大学教授 伊藤 隆吉氏

東京大学教授 杉山 好氏

都立大学教授 沼田稲次郎氏

青山学院大学教授 伊丹 潔氏

立教大学教授 森脇 襄治氏

中央大学理工学部  
都立大学工学部 安藤 瑞夫氏

都立大学工学部  
東京女子大学文学部 関 嘉彦氏

東京薬科大学  
日本大学教授 岩井 肇氏

青山学院高等部修養会  
東京神学大学 早大(碧稲会)教授学生交歓会

神奈川大学講師 小高 泰雄氏

東京女子大学教授 白井 常氏

日本国際連合学生会早稲田大学  
(9月23日現在)

●ゲスト・ルーム宿泊者

◆七月

貝塚茂樹氏夫妻・東畑精一氏・茅誠司氏・川喜田二郎氏・加藤秀俊氏・長井信一氏・小島麗逸氏・永井道雄氏・鈴木皇氏・大島貞夫氏・深田尚彦氏・石川才顕氏・阿部静三郎氏・杉本真一氏・篠原弘志氏・石塚司農夫氏・西村秀夫氏

◆八月

大須賀潔氏・林竹二氏

松村康平氏・向坊長英氏・気仙三郎氏・佐藤誠三郎氏・小高泰雄氏・清水竜登氏・山口操氏

◆九月

名東孝二氏・久保田武勇氏・エールランゲン・ニールンベルグ大学総長フリードリヒ博士夫妻・浅井真男氏夫妻・杉山好氏夫妻  
(9月23日現在)

▼編集後記▲

一九五九年十一月五日、四谷福田家においてセミナー・ハウスの構想というよりは夢を、大浜、茅、上代その他の長老諸先生に打ち明けてより足掛け七年、夢を追うて今日にいたり、その間の苦勞などは、ついぞ口外したこともなかったのであるが、開館記念セミナーの閉講式の終りに永井委員長から指名された、感動のため心も静かではなかったが、先輩や社会がいかに善意に富んでおられるか、大学と人間、そして日本と世界に対して深い愛情をいただき、ともに憂えているかを若い学生諸君に話した。セミナー・ハウスの実現が私をしてそういう確信を持つにいたらしめたのである。

紙面の都合で学生諸君から寄せられた多くの意見とセミナー・ハウスに対する期待とを記載できないのが残念である。

開館セミナー当時の泥んこ道が舗装され、拡声装置もでき、美しい庭園が八王子市から寄贈されて、セミナーにつかれた頭を休ませるような処が随所にくられた。

今は仲秋の好シーズン、まさに読書の秋はセミナーの秋でもある。セミナー・ハウスの丘陵からは美しい紫の西空に富士、大山、丹沢の姿がすっきりと現われている。セミナー・ハウスの環境は、秋が秀、春が優、冬が良で、夏はやや良といえる。とまれ十一月一日には、すべての工事が完成するので、法人・個人の寄付者を迎え、そして国公立大学関係者とともに、落成を祝うのである。

落成式の当日は、秋晴れの好天であるよう、そして武蔵野の美しい自然の中に美しい人間の心がかもし出す地上最良の祝典が展開されるよう祈らずにはおられない。

(S・I生)